## 53. 和服

第 62 期王位戦の第一局が 6 月 29 日に行われたが、戦いが始まるときの模様を新聞は次のように伝えた。伝統を大事にするような格調ある文章に魅せられた。

> 二人の若武者 緊迫の対局　能舞台に響く駒音―。名古屋能楽堂で開幕した王位戦。能の世界では舞台は神聖な場とされ、上がる際は白足袋の着用が必須となる。対局者もそのしきたりを守り、格式の高い和服姿で勝負に臨んだ。先に対局場へ現れたのは藤井聡太王位。清涼感のある黒い「紗」の羽織に、薄若草の着物を合わせた。続いて登壇した豊島将之竜王は薄ねずの羽織に淡い色の着物姿。両者ともはかまは礼装にも用いられるしま柄の「仙台平」を着用した。（東京新聞 6 月 29 日夕刊）

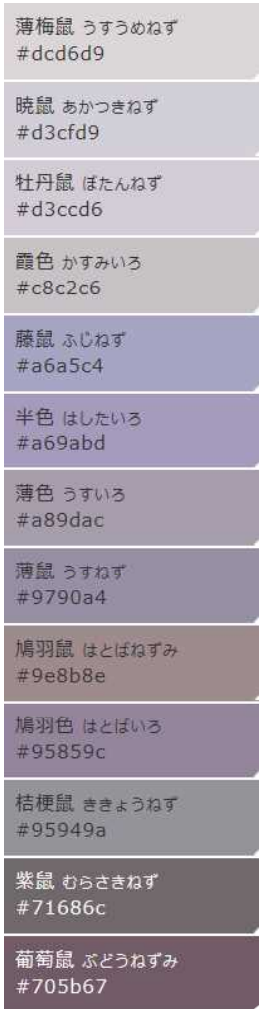
私は将棋は指さないが、着物（和服）には少し興味がある。が、読んで少しわからない個所があったので調べてみた。まず「紗（しゃ）」とは「綟（もじ）り織で織られた薄く透き通る絹織物」のこと。「薄若草」色は文字からどんな色か凡その見当がつくが、調べると「薄若草色」というのは色見本では見つからない。近い色は「若芽色」や「若菜色」というのが該当しそうだ。「薄ねず（うすねず）」は「薄鼠」（やや灰色い紫系の色）で色見本にある。

わからないのは「淡い色」で、これだけでは何色の淡い色なのか不明だ。もっとも、色見本の中には「薄色（うすいろ）」（やや灰色い紫系の色）というのがあり、これは特定の色を指している。「紫根に椿灰汁または明礬で染めた薄い紫色のことで、一般的に薄色といえば淡い色を指すが、濃い紫を濃色（こいろ）というのに対し、淡い紫色を薄色とよぶ」という解説もある。なので「淡い色」という特定の色があるのかと思って、妻に聞いてみたが「そんな色はないと思うよ、記者はその色の表現ができなかったから、ただ淡い色としたのよ」と素っ気なかった。確かに写真を見ると私も思いつかない色だ。

ところで「淡い」と「薄い」は紛らわしい。「淡い」は辞書に「色や味などが際立たず薄い」などとあり、「薄い」との判別がはっきりしない。ネットで「薄い色は薄めた色、淡い色はそこに白を加えたような色がぼんやりしている色」というのを見つけた。これが一番わかりやすい。

日本人は色に対しても繊細だ。いったいどのくらいの色の名前（和色）があるかと思い、ホームページを調べると 465 色とか 479 色とかがある。「和色大辞典」を見ると、鼠色だけでも 33 種類もある。鼠色は特に多いのかも知れないが。その内訳はこうだ。

桜鼠（さくらねず）、鴇鼠（ときねず）、利休鼠（りきゅうねずみ）、湊鼠（みなとねずみ）、錆鼠（さびねず）、薄梅鼠（うすうめねずみ）、薄鼠（うすねず）、藍鼠（あいねず）、暁鼠（あかつきねず）、牡丹鼠（ぼたんねず）、藤鼠（ふじねず）、紺鼠（こんねず）、鳩羽鼠（はとばねずみ）、桔梗鼠（ききょうねず）、紫鼠（むらさきねず）、葡萄鼠（ぶどうねずみ）、梅鼠（うめねず）、濃鼠（こいねず）、紅消鼠（べにけしねずみ）、薄雲鼠（うすくもねず）、茶鼠（ちゃねずみ）、江戸鼠（えどねず）、柳鼠（やなぎねず）、白梅鼠（しらうめねず）、白鼠（しろねず）、絹鼠（きぬねず）、深川鼠（ふかがわねずみ）、銀鼠（ぎんねず）、青磁鼠（せいじねず）、素鼠（すねずみ）、鼠色（ねずみいろ）、丼鼠（どぶねずみ）、千草鼠（ちぐさねず）




名前から色を推測できるものはわずかで、見当もつかない方が多い。しかも、逆に色見本から名前を当てるとしたら 0 点に近いだろう。右の写真を見るとわかる。

そして「仙台平」。私は尺八を習っていたので 30 歳になる頃、先生（師匠）の勧めで羽織袴を揃えた。袴は縞模様、気に入った仕立てで演奏会に何回か着た。そして 60 歳になる頃、長男の結婚式のときにその羽織袴を着た。宴が終わる頃、長兄に言われた。「何だ、仙台平じゃないのか、家にあったのに」。慌ただしい席だったのでそれきりだった。調べると仙台平は仙台で作られた生地の織り方の名称で袴地の最高級品とある。だが、長兄は生地をみて言ったとは思えない。なぜそう言ったのか、いまだにわからない。

20 ～ 30 代の頃は、寮や家でも結構和服を着ていた。背筋が伸びて気持ちが良いのだ。だが 40 代になると徐々に着なくなった。仕事の忙しさと気温が高めになってきたのが影響していたのかも知れない。残念だが、昨今の夏の暑さでは浴衣も着る気になれない。味気ない T シャツではなく、本当は浴衣と下駄で夕暮れの一時（いっとき）を過ごしたいのだが。　（2021 年 7 月 14 日）